特集　生産性向上支援

日本システム開発

研究開発データを資産化する業界特化型ソフトを開発・発売

独立系のソフトウェア開発会社である日本システム開発は、大手電機メーカーからの受託開発を事業の柱にしながら、開発から販売、保守まで一貫して行えることを強みに、独自のパッケージソフト開発に注力している。

今年7月には、研究開発データベースソフト「配合設計システムMDSS」から、化粧品・医薬部外品の研究開発に特化した「MDSS-Cosme」(写真)の販売を開始した。研究開発データの共有・有効活用による作業効率向上が図れるほか、資産として技術継承につながり、研究開発レベルの底上げも期待できる。

MDSSは、もともとゴム製品の研究開発における課題解決を目的に、処方設計データの一元管理と検索ができるソフトとして展開した。既存システムから移行しやすい設計に加え、従来から使用する帳票フォーマットやアウトプット用データなどを踏襲したいといった要望にも対応する「ユーザーの自由度が高い」機能が好評を得て、既に様々な業界で導入事例を生み出してきた。その流れを受け、化粧品の研究開発に特化したソフト「MDSS-Cosme」を開発。既に4社が導入し、活用しているという。

基盤となるマスター機能には、原料・成分一覧はもとより、表示名称やトレーサビリティ情報、処方とそのプロセス、評価試験結果などの登録が可能で、輸出先の国の法律・規制などの設定もできる。登録データは様々な条件指定で即時検索できるため、有効成分はもとより、防腐剤などのキャリーオーバー成分のチェックにも有効だ。

また、オプション機能として、製品化されたデータのみ管理する「製品管理」や、プロジェクトなどの進捗管理を行う「工程管理」も用意しており、ユーザーのニーズ・特性に合わせてカスタマイズすることもできる。